

浮世風呂・浮世床の「に」と「のに」—逆接の接続助詞—

山村仁朗（京都大学大学院）

1 逆接ということ

複文前句末に現れる「が」「けれども」「のに」などは逆接の接続助詞と言われる。すなわち、これらの語は二つの句の表す事態をある一定の関係の下に関係づける働きをしている（関係づけ方にまでその勢力が及んでいる）。例えば、

雨が降っていたが、運動会は行なわれた。

という文において、二つの事態「雨が降っていた」と「運動会が行われた」は共に現実の事態であり、現実の事態として共存している二つである。しかし、その二つの事態は、

晴れていたのに運動会が行なわれた。

の「(空が)晴れていた」と「運動会が行なわれた」のように、本来的に現実の事態として共存しうるようなものとして関係づけられているのではない。むしろその逆で、二つは現実の事態として共存しえないようなものとして関係づけられている。とは言っても、二つの事態が論理的に矛盾するような関係にあるのではない。「雨が降っていた」と「運動会が行なわれた」とは現実の事態として共存しうるし、この文では実際に共存している。両者がそのような質のものとしてあるのは話し手が二つの事態をそのようなものとして捉えているからであり、話し手によって両者は共存しえないようなものとして関係づけられているのである。この文の二つの句は両者が現実の事態として共存しえないような関係にあり、前句末の「が」は両句をそのような関係のものとして結びつけることに働いていると考えられる。この「が」を「けれども」や「のに」に置き換えても、この関係は変わらない。

雨が降っていたけれども、運動会は行なわれた。

雨が降っていたのに、運動会は行なわれた。

すなわち、「けれども」と「のに」も「が」と同様の働きをしていると考えられる。二つの句の関係づけ方という面から、これらの語の働きは一括することができる。逆接とは二つの事態が現実の事態として共存しえない関係にあることを言い、逆接の接続助詞とは二つの句をそのような関係のものとして結びつける働きをする語形式のことである。その意味で、「が」「けれども」「のに」は逆接の接続助詞と言えよう。

しかしながら、これらの諸形式は逆接という共通性を持ちつつも、それぞれに固有の性格がある。「のに」の場合、「予想と反対の結果に対する意外・不服の気持ちをこめて。¹」な

¹ 国立国語研究所『現代語の助詞の助詞・助動詞—用法と実例—』（秀英出版 1951年5月）

どと言われるように、「が」や「けれども」と比較して話し手の文内容に対する思いが強く印象される。

雨が降っていたのに、運動会は行なわれた。

雨が降っていたが、運動会は行なわれた。

雨が降っていたけれども、運動会は行なわれた。

「のに」の文に、「雨が降っている」状況で「運動会を行なわれた」ことに対して話し手が意外に思っていることが強く印象される。このことは既に多くの研究で指摘されている²。しかし、なぜ「が」や「けれども」と比べ、「のに」にはそれが強く印象されるのか。そして、なぜそのことを「のに」という形式が担っているのか。このことについて今まであまり説明がなされてこなかったように思う。

私の調査した限り、そのことの説明を試みたのは丹羽哲也氏のみである³。丹羽氏はその理由を「のに」の文の前句から引き出される「推量・希求が話者自身のものである」からとする。例えば、後句が命令・意志・勧誘、推量、疑問などを表す場合、「のに」の文は成り立たない（「が」「けれども」は成り立つ）という現象がある。

×寒いのに、出かけよう。

寒いが、出かけよう。

寒いけれども、出かけよう。

「のに」の文が成り立たないのは、「(外が)寒い」という状況から予想される「出かけたくない」という事態と後句の事態が共に「話者が自分の意見として」述べたものであるがゆえであるとする。そして、その前句に認められる話し手の自分の意見という質が「のに」の文の内容に対する話し手の思いの強さを感じさせる根拠になると説明する。だが、仮にそのことを認めるとしても（腑に落ちないがそれに反論する準備が無い）、なぜ前句が話し手の意見という質を持つのかということについての説明がなされなければならず、完全な解決には至っていない。

さて、「のに」が「が」や「けれども」と比べ、話し手の文内容に対する気持ちが強く印象されること、そしてそのことを「のに」という形式が担うこと、つまり「のに」の性格の所以について考えるとき、「のに」の形成期に遡って、その本来の性格を考察することがその問題を解決する一つの有効な方法となるのではないかと思う。そのように考えて、この発表では浮世風呂・浮世床の「のに」の分析を通して、現代語「のに」の性格について考えてみたい。

² 『現代語の助詞・助動詞』の他に、前田直子氏、丹羽哲也氏など

³ 丹羽哲也「逆接を表す接続助詞の諸相」（大阪市立大学文学部『人文研究』第50巻第10分冊 1998年12月）

2 「のに」の文の2つのタイプ

「のに」の文を分類する試みは既に丹羽哲也氏によってなされている。丹羽氏は、現代語の「PのにQ」という文について、

Pが成立し、Pからの推論を経てRを話者が推量・希求する状況において、または、Pを話者が推量・希求する状況において、それに反して、Q(=～R)が成立する。ということを表すと述べる⁴。これは、「のに」の文を線条的に分析したもので、前句から後句へと時間の流れに沿ってその内容を記述したものである。それ以前の研究では、「のに」の働きを

意味内容の衝突する(食い違う)事がらを、対比的・対照的につなぐ。⁵

のように大きく一まとめにし、「のに」の文の分類はなされない。それに対して、丹羽氏は前句に質の異なる二つがあるとし、それに従って「のに」の文を分類した点で、それ以前の研究より優れていると思う。a「Pが成立し、Pからの推論を経てRを話者が推量・希求する」、b「Pを話者が推量・希求する」はそれぞれ次のような文である。

a 春が来たのに、暖かにならない。

b あらかじめ言っておいてくれたらよかったのに、どうして言ってくれなかったの。

ここでも、「のに」の文を分類してみたい。但し、実際に分類した結果は丹羽氏に近いものになるが、丹羽氏の分類基準と全く同じではない。分類の基準は「のに」が関係づける二つの事態の質の面に建てる。

aの文は前節で見たタイプの文である。つまり、二つの現実の事態「春が来た」と「暖かにならない」とは、現実の事態として共存しえないような質のものとして関係づけられている。そして、それはあくまで話し手によってそのようなものとして関係づけられるのである。このタイプの文では「のに」によって関係づけられる二つの事態は共に現実のそれである。

一方、bにおける二つの事態「(あらかじめ)言っておいてくれたらよかった」と「言ってくれなかった」とは現実の事態として共存しえないものとして関係づけられている。しかし、話し手によって二つの事態がそのように関係づけられているだけではない。この二つは論理的にも対立しているのである。前句「言っておいてくれたらよかった」とは「言っておいてくれたらよかったと話し手が思っている」こと一話し手がそうあることを望んでいる、そうあるべきだと思っている、当為の事態なのである。この場合、前句の「～(たら)よかった」とは「言っておいてくれる」ということが当為の事態であることの言い表しである。後句はAと同様、現実の事態である。

現実の事態として共存しえない関係にある二つが論理的にも矛盾の関係にあるか否かによって、「のに」の文を二つに分類する。二つのタイプを並べて記しておく。

A 二つの事態が現実の事態として共存しえない関係にあるもの 《現実—現実》

B 二つの事態が現実の事態として共存しえず論理的にも矛盾する関係にあるもの 《当為—現実》

⁴ 注2

⁵ 注1

3 浮世風呂・浮世床の「のに」

「のに」は「の」と「に」とに分析可能である。その「の」は準体助詞（形式名詞）と言われるそれである。

朝早く起きるのには健康によい。

その「の」は国語史の中世（鎌倉～室町期）において、用言の終止形と連体形が同形化することの影響を受けて出現した。「のに」の形成期はそれ以降ということになるが、具体的には江戸後期に書かれた「浮世風呂」「浮世床」にその例が見られる。

「浮世風呂」と「浮世床」は式亭三馬によって書かれた江戸後期を代表する言語資料であり、近代語に繋がっていくという点で価値がある。

では、「のに」の形成期と考えられる浮世風呂・浮世床の用例の分析を始めよう。浮世風呂・浮世床の会話文の中に「のに」という形態は19例ある。今、その全例を出てくる順に挙げる⁶。

- ①夫ばかりですめば能のに。田圃通を抜ました（風前上⁷）
- ②やつぱり銀にしておけば能のに。（風前下）
- ③とつさまが曲つた事の嫌な人だのに。あんな子を持たしたから。世間の人さまに。私が面目次第もねへ。（風前下）
- ④あれほど待て居て呉なといふのに。（風2上）
- ⑤おれが骸がきかねへから。守が一つ出来ねのに。年子だア。（風2上）
- ⑥年老なら年老らしく引込で居りやアいのに。若者並にしやべるからのことさ。（風2下）
- ⑦私が一体俺相かしい性で。ぞんざいものでございますのに。つひしか。ぷつつりともおつしやりません。（風2下）
- ⑧お食をたべ居る時分だのに。猪より先へーさんにツサ。（風2下）
- ⑨あれほど約束したのに。（風3上）
- ⑩いつウまでも松をとらずにおけばよいのに。何所の内でも直さまお取だねへ。（風3上）
- ⑪達者な身でも一かたけお飯をたべねへと氣色が悪くなりますのに。ましてや病氣の時は。それだけに養生を致たが能うございます。（風3上）
- ⑫其くまへだれもネ。四尺裁ツて貰つて二布にいたせばつい通りでよいのに。七尺も買つて三布にいたすから。サア紐も裁端を集めて縫ふ気はございません。（風3上）
- ⑬着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば。さば／＼とした布子も着られますのに。穢たらその儘に葛籠の隅へおし込で置ますし。兎角針さへ持ば昼も居眠ますが。（風3上）
- ⑭些と熱いと思つた湯も。湮ちつやアロがうるせへから。しんぼうして這入居るのに。あんまりてへばむやみな仕方だ。（風3上）

⁶ テキストは浮世風呂・浮世床ともに岩波文庫版（和田萬吉校訂）を用いる。句読点の区別をしないなど、編集方針としてテキストを忠実に翻刻しているからである。

⁷ 用例の所在の表示。1文字目は浮世風呂と浮世床の別（風／床）。2文字目は第何編かの別（前／初／二／三／四）。3文字目は編の「上／中／下」の別を記す。

⑮世間ぢやア餅を搗くの。煤を掃くのといふのに。其勘弁もなく。寒声をつかふの。寒声色を語るのと。毎晩年忘れだ。(風3下)

⑯おツかアと這入ればいゝのに(風4下)

⑰あれほどいひつけておくのにぞんざいなやつだ。(風4下)

⑱金銭を出せば好次第の女が買へるのに(床2下)

⑲二親さへ寝たのに。通夜をしてナ。(床2下)

⑩は逆接の関係にあると考えることが出来ないので、考察の対象から外しておく。対象とする18例について注目したい特徴は次の二点である。

(i) 前句末(「のに」の直上)が「～すればいい」という形式のものが多いこと ①②⑥⑩⑫⑯

(ii) A、Bどちらにも分類可能である例があること ④⑨⑰

3-1 「～すればいいのに」という形式が多いことについて

まず、(i)について考察する。18例のうちの6例—3分の1がこの形式である。この割合は浮世床(浮世風呂に関してはまだ調査できていない)に現れる「が」「けれども」と比較して非常に高い割合であり、「のに」の特徴と言えよう。因みに、接続助詞「が」(逆接に限定しない)の場合、浮世床の会話文の中に168例あり、そのうち「が」が「いい」に下接する例が14、そのうち「～すればいいが」という形式のものは1例のみである。「けれども」そのものは存在しないが、それに準じて考えられる「けど」「けれど」「けれエド」「ども」「ども」は合わせて56例あり、6例あり、そのうち「～すればいいけれども」は1例のみである。

(i)の形態—前句末が「～すればいい」のものは先の分類のBタイプのものである。例えば⑩は見てみよう。

(十か十一歳くらいの小娘二人の会話)

お角「…わたしもね。お稽古のお休が何よりも＼／最う＼／＼／＼／＼／—イばんよいよ。夫だからお正月の來るのがおたのしみだよ

丸「ア、ネエ。お正月も松が取れると不景気だねへ。もつと。⑩いつウまでも松をとらずにおけばよいのに。何所の内でも直さまお取だねへ。否だつちやアないよ

この文の「のに」によって関係づけられる現実の事態として共存しえない二つとは、「松をとらずにおく」と「松を直にとる」である。「松をとらずにおけばよい」とは「松をとらずにおけばよいと話し手が思っている」ことであり、そのことと「松をとる」という行為とが現実の事態として共存しえない関係にあるのではない。その「松をとる」という行為と「松をとらない」という行為とは現実の事態としてその両方が成り立つような行為ではない。すなわち、論理的にも矛盾する関係にある。また、前句の「～ばいいのに」は「松をとらずにおく」ことが話し手が望む事態—当為の事態であることを言い表す形式である。従って、この文の二つの事態を当為か現実かという観点からみたとき、《当為—現実》の関係にあると

いうことになり、Bタイプの文ということになる。同様に、前句末が「～すればいい」の形式である①②⑥⑫⑯もBタイプである。①⑫は

・(金兵衛と徳蔵の風呂の中での会話)

金「ハイ徳蔵さんきのふは何所へお出なすつた、大分御機嫌だつけネ

徳「ハイ王子へ行きました

金「ハ、ア、海老屋か扇屋かネ

徳「①夫ばかりですめば能のに、田圃通を抜ました

・(自分の家で働く下女の悪口)

●「⑫其(まへだれ)もネ。四尺裁ツて貰つて二布にいたせばつい通りでよいのに。七尺も買つて三布にいたすから。サア。紐も裁端を集めて縫ふ氣はございません。

「夫(海老屋か扇屋かに行くだけ済ます)ばかりですむ／四尺裁ツて貰つて二布にいたす」と「田圃通を抜ました／七尺も買つて三布にいたす」ことが矛盾の関係にあり、《当為一現実》の関係にある。「田圃通を抜きました」とは「それで済まなかった」ことの、「七尺も買つて三布にいたす」は「二布にしない」ことの、具体的な内容による言い換えである。

⑥は、

(お舌と喧嘩していたばゞが逆上せて。仲裁に入った傍の人に衣装戸棚の方へ連れられていく様子を見て)

お舌「⑥ナニサ。年老なら年老らしく引込で居りやアいゝのに。若者並にしやべくるからのことさ。形態上、「年老なら年老らしく引込で居る」と「若者並にしやべくるからのこと」とが関係していることになるが、後句は現実の事態そのものの描写そのものではない。「若者並にしやべくるからのこと」とは話し手のある事柄に対する評価であり、その評価の対象である事柄とは「ばゞの引っ込んでいない(＝でしゃばる)」ことである。その「引っ込んでいない(＝でしゃばる)」ことと「年老なら年老らしく引込で居る」とが「のに」によって関係づけられる二つであると考えられる。評価を表す後句「若者並にしやべくるからのこと」は「ばゞの引っ込んでいない」ことを質として含み持っている(だから、評価を表すと言える)。そして、その「年老なら年老らしく引込で居る」と「ばゞの引っ込んでいない(＝でしゃばる)」とが矛盾の関係にあり、事態の質としては《当為一現実》ということになる。

②と⑯は形態上後句を持たない。

・(後兵衛が銀を取られるのが惜しいと、マッタをして、桂馬と取替えた。それに対する先蔵の台詞)

後「銀は惜い。こゝは桂馬でソレそつちが王手だ＼／

先「いま＼／しい奴だ。②やつぱり銀にしておけば能のに。

・(15、6歳の田舎者の下女が3歳くらいの子供を旦那のいる男湯に連れてきた)

下女「旦那さんエ。お坊さんをお連申て参りました

福助「ヲイ。来たか。アゝ邪魔な坊主めだ。⑯おツかアと這入ればいゝのに

下女「御新造さんは今日はお頭痛がなさいますし。乳母どんはちつと。

これらの「のに」は品詞論としてしばしば終助詞と扱われることがあり、事柄を不満・意外

に思う話し手の気持ちを表す形式と言われる。しかし、その表現性は接続助詞としてのその働きに由来するものであることは間違いないであろう。そして、これらを接続助詞的にみると、後句として「桂馬にした（＝銀にしなかった）／こっちに来た（＝入らないコト）」を考慮することが可能であろう。「銀にする／おツかアと這入る」と「桂馬にした／こっちに来た」とが矛盾の関係にあり、事態の質としては《当為一現実》である。終助詞としての性格は当為の事態に対する現実の事態の受け入れがたさから生まれる表現性である。

さて、「～すればいいのに」という形式をBタイプと位置づけた。⑬と⑭も（i）に準じてBタイプに位置づけてよいであろう。

- 「イエモウ。ほんに慌た物でございますよ。⑬着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば。さば\／とした布子も着られますのに。穢たらその俣に葛籠の隅へおし込で置ますし。兎角針さへ持ば昼も居眠ますが。ホンニ\／仕様仕方のない物でございます

この文の「のに」によって関係づけられる二つの事態とは「着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置く」と「穢たらその俣に葛籠の隅へおし込で置ますし。兎角針さへ持ば昼も居眠ます」であり、矛盾の関係にある。前句のなかの「さば\／とした布子も着られます」とは「着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば」という仮定条件句に対する帰結句であり、それは話し手が望んでいる状態である。すなわち、「着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば。さば\／とした布子も着られます」という前句の事態は当為的な事態と考えることができる。前句を一般化すれば「～ば…のに」と表すことができるが、この「ば」は「～すればいい」の「ば」と同じものであり、「さば\／とした布子も着られます」とは「～すればいい」の「いい」を具体的な行動に置き換えたものであると言えよう。⑭も同様である。

短「色事師も骨のをれたものだ

長「其癖にはり中ねへものよ 松「はる\／といふ奴は。皆はり倒されてしまふ

銭「どういふ気だらう。⑭金銭を出せば好き次第の女が買へるのに

びん「事を好んだもののだの

土龍「イヤさう云なさんなそこが色と恋のとの差別だよ。女郎のは色事。地者のは恋路と云物だ。

「好き次第の女が買へる」は「金銭を出せば」という仮定条件句の帰結句であり、「～すればいい」の「いい」を具体化したものである。以上の例は全てBタイプであり、このタイプの例が非常に多いことがわかる。

3-2 AタイプともBタイプとも考えられるものについて

次に、(ii) について見てみよう。④は、おさみがおばちとの約束を破って先に風呂屋にやって来た、そこへ後からおばちがやって来たという場面でのおばちの台詞である。

おさみ「アイヨウ。お撥さんかお早いの

おばち「お早いじやアねへはな。おめへといふものはしよにんな者だの。さうしなせへ。随分つき

合をしらねへが能のさ。④あれほど待て居て呉なといふのに。

おさみ「それでもおめへのお飯は。埒が明ねへものを。

この文も先の②⑩同様、形態的にみれば「のに」で切れた文で、後句が存在しない。しかし、②⑩と同様、後句を考えることは可能であろう。その後句の事態とは「待たなかった」ことということになる。一方の前句は形態上「あれほど待て居て呉なといふ」ということができる。すなわち、話し手（おばち）が「～」と言った、その行為を前句と捉えるということである。この場合、「のに」の文のタイプとしてはAということになる。他方、そのおばちの発言内容を見ると、「あれほど待て居て呉な（待つてほしい）」とは話し手が望む当為の事態であり、その意味でこの文はBということも可能なのである。しかし、後句「待たない」と対立しているのは何かということを考えるならば、Aとは言えない。後句と関係づけられている事態とはその「おばちが言った」という行為ではない。後句と対立しているのは前句の当為の事態として語られるおばちの発言内容である「待つ」ことである。そして、「あれほど～呉な（といふ）」は「待つ」という事態が当為のそれであることを言い表す文形式であるとすべきであろう。つまり、この文はBタイプなのである。この文が形態上AタイプでもBタイプでもありえたのは前句の中に「待つ」と「いふ」の二つ動詞が含まれているからである。「あらかじめ言っておいてくれたらよかった」が話し手の思ったことの描写であるのに対して、「いふ」は現実の事態の描写ということができる。その中で、④の「おばちがいふ」とは、「待つてほしい」というおばちの思いに基づく行動と言うことができよう。その意味でこの文の前句の事態の質は当為の事態であると言えよう。そのとき、「いふ」は「～呉なといふ」という当為の事態を表す形式の一部を形成していると言うことができる。このように考えることが可能なのは前句の主語が話し手自身である場合に限られる。

⑨と⑰も同様に考えることができる。⑨の場合、文が「のに」で切れていると見るのがよいであろう。

（昨日遊びに来るという約束を破ったおはねに対する、おかこの台詞）

おかこ「おはねさん。おめへきのふはなぜ来なんだ。恨な者だのう。⑨あれほど約束したのに。きのふはの。旦那様が一日御入だつたはな

この文の後句を求めるならば、「おはねが来なかった」となる。前句には動詞が「約束した」の一つしかない。しかし、これは「おはねはおかこに来るということを約束した」という意味である。「約束した」とはおかこが「おはねが来る」コトを望んでいる、そのことに基づく行為であり、前句の事態は当為の事態としての質を持っていると言えよう。この文の前句と後句は、「来る」と「来ない」と論理的に矛盾している。「約束した」その内容は文脈上省略されているに過ぎない。④の「～といふ」と同様、それが具体的な行為をも表している。この文もBタイプと考えることができる。⑰の場合、形態上後句が存在する。

（ぞんざいな物言いをする権助に対しての台詞）

権助「ハイ、隠居爺が来ました

めくいち「ナンダ、隠居爺。コレ、どうしたもんだ。⑰あれほどいひつけておくのにぞんざいなや

つだ。御隠居さんがお出なさりましたといふものだ。そりやアまアいゝが、早く爰へお通し申せ

前句は「丁寧な言葉遣いをしろといひつけておく」ことである。後句は形態上「ぞんざいなやつだ」となるが、これは④や⑨のような現実の事態について述べたものではない。「権助」の行動に対する評価の表現である。そして、その評価の対象とは「丁寧な言葉遣いをしない」ことである。それが前句の「丁寧な言葉遣いをする」と論理的に矛盾の関係にある。「〜といひつけておく」もやはり当為の事態を表す形式ということになる。後句の「丁寧な言葉遣いをしない」ことは「ぞんざいなやつだ」という評価の言い表しとその評価の対象として質的に持っていると言えよう。

以上、(i)(ii)の特徴を持つ例を見てきたが、これらは全てBタイプであった。これらの文にも現代語同様の文内容への話し手の不満、意外といった思いが強く感じられるのであるが、それは先の②と⑥を分析したときに述べたように、当為の事態が共存しえない事態が現実として成立していることから来る表現性であろう。

さて、浮世風呂・浮世床の「のに」全18例のうち半数を超える11例がBタイプである。僅か18例しかないものに対して数の論理を持ち出すのは非常に危険であるが、「のに」が形成される江戸後期のそれ、すなわち「のに」は本来Bタイプのものと考えられるのではないか。それは、現代語の「のに」と言えば、まずAタイプを思い浮かべることと逆である。しかし、そのように考えて進めてみよう。そのとき、AタイプはBタイプとどのような関係にあるのかが次の問題となる。

3-3 Aタイプの「のに」について

もし、Bタイプを基本に考えるならば、なぜAタイプの前句は敢えて当為の事態ではなく現実の事態を表しているのか、ということが直接の問題となろう。その答えとして具体的には二つのパターンが考えられる。一つは前句で述べるべき当為の事態を予想させる事態が現実のそれとして述べられる場合である。③⑬⑭⑮がそれに該当する。⑬の例で、「のに」によって関係づけられる二つの事態とは「二親さへ寝た」と「通夜をして(た)」であり、いずれも現実の事態であるAタイプの文である。

(自分の家では何もしないくせに、好きな女性ができたらその人の家に行って手つだいなどをする者がいる、と皆で話している場面での短八の科白)

短八「あるとも。八百屋の青右衛門が所の。お豆をはりに来る息子あるがナ。此中妹のお柚こんぢうが死だら。いゝぢやアねへか。⑬二親さへ寝たのに。通夜をしてナ。それもいゝけれどナ。若い身そらで数珠をだしやアがつて拝んだアス。

この文をBタイプとして考えることができないのは、前句が現実の事態だからである。仮にこの文をBタイプとしようとするならば、

⑬' 寝ればいいのに。通夜をしてナ。

通夜をしなくてもいいのに。通夜をしてナ。

という文になる。すなわち、前句を後句と矛盾する当為の事態にすればよい。前の文を用いるならば、「お豆をはりに来る息子が寝る」ことがそれに該当する。さて、「二親さへ寝た」は「お豆をはりに来る息子が寝る」との関係にあるだろうか。「二親さへ寝た」の「二親」と娘が無くなったわけであるから、この場合「最も寝てはいけない」存在、「寝ないことの極的な位置にいる」存在である。その極である存在が「寝た」わけであるから、当然それ以外の存在は寝ることが考えられ、「お豆をはりに来る息子」もその中に含まれる。つまり、「二親さへ寝た」は「お豆をはりに来る息子が寝る」という当為の事態を予想させる現実の事態なのである。

⑭の後句「あんまりてへばむやみな仕方だ」は評価の文であり、その対象である「(周りの人のことを気にせず)騒いで入っている」ことが現実の事態である。

(風呂の中でおさるやおべか達が騒いで、湯のはね、そばにいたうんざり鬢という女にかかり、女が怒る)

女「うぬらばかし買切居る湯ぢやアあんめへしあたり人様も御座らツしやんねへ様に。野方図な奴等ぢやアねへか。コレ。⑭人は人と思つてナ。些と熱いと思つた湯も。湮ちやア口がうるせへから。しんぼうして這入居るのに。あんまりてへばむやみな仕方だ。

この文をBタイプにすれば、

⑭' お前たち (=おさるたち) も静かに入ればいいのに。騒いで入る。

といった文になる。「(人は人と思つてナ。些と熱いと思つた湯も。湮ちやア口がうるせへから。) しんぼうして這入居る」は話し手である「女」自身の行為であるが、その女も「おさるたち (=お前たち)」も同じ銭湯の客であり、銭湯内では言わば同じ身分である。その同身分の「私」が静かに我慢して入っているのだから、「お前たち (=おさるたち)」も静かになるべきであると思っているわけである。つまり、この文においても前句の「しんぼうして這入居る」は当為の事態である「お前たちも静かに入る」を予想させる現実の事態なのである。

⑮③の場合もそれぞれ当為の事態を求めれば、「あの子も世間同様に餅を搗いたり、煤を掃いたりする／あの子も曲ったことが嫌いである」ことがそれに当たる。現実の事態である前句「世間ぢやア餅を搗くの。煤を掃く／とつさまが曲つた事の嫌な人だ」がそれらを予想させる。世間一般の事態から個別的な事態を、親の性格から子の性格を、それぞれ予想させている。

・(母親が子供に対する不満を述べている)

●「どこの國にかおめへ。按摩を六人まで呼込で、手\に肩を揉せながら。風鈴蕎麦を惣仕舞にして。蕎麦屋に爛をさせてはとち食ふだ物を。有頂天になつて夜鍋仕事も手につくもんぢやアねへ。⑮世間ぢやア餅を搗くの。煤を掃くのといふのに。其勘弁もなく。寒声をつかふの。寒声色を語るのと。毎晩年忘だ。

・(母親が子供に対する不満を述べている)

か>「人といふ者は、何ぞれ角ぞれ、取得のあるもんでござりやすが、あれに限ちやア、鶺鴒の毛で突た程もござりません、③親に似ねへ子は鬼子とやらで、とつさまが曲つた事の嫌な人だのに、あんな子を持ちましたから、世間の人さまに、私が面目次第もねへ、

これらが敢えて前句に現実の事態を述べるのはその表現性に関わるものと思われる。単なる当為の事態でなく、それを予想させる事態が現実のそれを前句に置く。それは現実の事態としての、後句の事態との距離により隔たりを持たせるものである。その隔たりの大きさがこれらの文に現れる話し手の不満や意外に思う気持ちをより表面化させると考えられる。

二つ目は、前句の現実の事態が当為の事態の理由となっている場合である。⑤⑦⑧がそれである。⑤⑦⑧の前句「守が一つ出来ねへ／私が一体働相かしい性で、ぞんざいものでございます／猪は最前樂屋へ引込で、お食をたべ居る時分だ」は本来そこで述べられるべき当為の事態「子供はいらない／主人が怒る／追いつけない」の理由となっている。

・(息子夫婦に対する不満)

さる「さうさ、自由にならねへものよのう。おらが内じやア、おれが骸がきかねへから。⑤守が一つ出来ねへのに。年子だア、ホンニちつとおすそわけしてへ位よ。

・(自分が奉公している主人の気立てのよさの自慢)

やす「ハイ、いへもう私の旦那をお誉め申すもいかゞでございますが、惣別お氣立のよいおかだでネおまへさん。あなたがお屋敷にお出遊す時分は、お部屋中で評判のお結構人でございます。⑦私が一体働相かしい性で、ぞんざいものでございますのに。つひしか、ぶつつりともおつしやりません。

・(忠臣蔵の勘平が間違っで殺した定九郎の財布を持って逃げたときの話)

女房「…つかんで見たる金財布。天のあたへとおしいたゞきツサ。天道さまが人を殺して取れと何教るものか。⑧ソシテまア猪は最前樂屋へ引込で、お食をたべ居る時分だのに。猪より先へ一さんにツサ。どうして人の足で一さんにかけたとて、猪に追ツつかれるものかな。

これらが当為の事態の代わりに用いられることもやはり表現性に関わる。理由とは当為の事態を話し手が望んでいる(まさに当為している)ことの根拠である。そして、それを敢えて表すことは話し手が単に当為の事態を望んでいるのではなく、そのことを望まざるをえないのであるという印象を与える。にもかかわらず、その当為に事態は現実として成り立たない。その分、話し手の不満・意外などの気持ちは強く表面に現れることになる。

以上、三節全体を通して「のに」の本来の性格はBタイプのものであり、AタイプのもものはBタイプの特異なものであると考えた。

4 この発表のまとめ

始めの問題に戻ろう。現代語の逆接の接続助詞「のに」は「が」や「けれども」よりも話し手の事柄に対する不満・意外などの気持ちを強く感じさせるがそれはなぜか。浮世風呂・浮世床の分析を通して「のに」は本来論理的に矛盾する二つの事態を結びつける形式である

と考えられた。それに対して現代ではむしろ単に現実の事態として共存しえない関係にあることを示す働きをしているように見える。そこから考えられることは、「のに」の文が二つの事態を論理的に矛盾するような示す、そのような逆接であることを論理的に保証する形式であるがゆえに、「のに」の文は「が」や「けれども」の文よりも話し手の思いは強く表面化させるのではないか、と思うのである。この「のに」の性格を文法的に説明できるのではないか、ということが今回の発表の価値であると考えている。

しかし、今日の発表だけでそのことが証明されるわけではない。そのことのためには浮世風呂・浮世床の「が」「けれども」との比較が必要である。

また、「のに」は逆接として解釈されることが多いのであるが、必ずしもそうではない。例えば今日考察の対象から外した⑩の文はその文だけみれば、逆接と考えて問題ない。しかし、文脈上逆接とすることはできない（詳しいことは今は述べない）。現代語でも、

- ・前もって作ったのに、これを合わせます。
- ・旅行に行くのに、かばんを買った。

これらの「のに」は普通一語として扱われない。しかし、これらと逆接のそれとの差は紙一重である（実際、後句を別の事態に置き換えれば、その「のに」は逆接のそれとして解釈されることになる）。語としての「のに」あるいは「の」と「に」は同じ働きをしているが、それが逆接として解釈される場合とそうでない場合があるということがおそらく真実であろう。このことに関して、明治期の「和英語林集成」（第二版）で「のに」に対応するものとして「as, because, since」が挙げられていることが注目される。

NO-NI, ノニ, (post-pos. *no* and *ni*) — As, because, since. *Samui no ni yoku sei ga deru,*
as the weather is cold you work hard,
see also under, *No.*

ときに逆接として扱い、ときにそうでないものとして扱うそれは、私たち分析する側の方法であって、言語としてそれらは連続的である。「のに」の、あるいは「の」と「に」という形態の文法上の働きを明らかにすること、その中での逆接のそれやそれ以外のものの位置を明らかにすることがより重要な課題である。

今日、表題に掲げながら扱うことのできなかつた「に」について簡単に触れておく。「に」は、浮世風呂・浮世床のそれは半数以上が逆接であるがそうでない用法も多い。すぐ上に挙げた現代語「のに」は浮世風呂・浮世床では「に」で表される。逆に現代では接続助詞「に」は「こともあろうに／要するに／～だろうに」など慣用的な形でしか残っていない。

また、現代語の逆接の「のに」の関係性、事柄の質については、今日見たものとまた別のものが存在する可能性がある。それらの確認および位置づけも今後の課題ということになる。